修正

日本修身書

高等小學用

卷二

8
89

K120.1
133a
2

修正 日本修身書

高等小學用　卷二

東京　金港堂書籍株式會社

目次

第一課　孝行
第二課　兄弟
第三課　女德
第四課　信實
第五課　朋友
第六課　恭謙
第七課　寛恕
第八課　用意
第九課　正直
第十課　節儉
第十一課　博愛
第十二課　學を勉む
第十三課　才智
第十四課　身を修む
第十五課　公益
第十六課　忠君
第十七課　義勇

第一課　孝行

人は皆父母の大恩をうけて人となりたるものなれば、その恩に報いずばあるべからず。

父の恩に報い、母の愛にこたへんが爲めに、心をつくすことを孝行といふ。

孝行は、人の第一に勉むべき行ひなれば、子たるものは、色をやはらげ、聲をよろこばしくして、父母につかへ、常にその體を養ひ、その心を安からしめんことをつとむべし。

川井東村は、年五十に近づき、始めて小學といふ書を讀みて、これにて親にうすかりしことをくい、これより用を節して、父母を養ひ、身を謹みて、その心を安んずることをつとめ、親の心をなぐさめたり。

又、親の病ひにかゝれる時、日夜その側を去らずして、ねんごろに介抱し、その死するに及び、甚だ哀しみて、厚くこれを葬りき。

第二課　兄弟

兄弟姉妹は、同じ父母より生まれ、同じ家にそだちしものなれば、その親しみ、世の人と同じからず。

されば、兄弟姉妹は、常に相愛し相敬ひ、事あるときは、心をかたむけて相なぐさめ、力をつくして相たすけずばあるべからず。

北條泰時は、友愛の心深かりし人なりき。かつて評定所にありける時、弟朝時の家に寇ありときき、たゞちにはせ行きて救はんとしたりき。その時、平盛綱、これをいさめて、「公は、天下の執權職なり、かるゞしく行き給ふなかれ。」といへり。泰時答へて、「今、寇、わが弟を殺さんとするに、われこれを救はざらんには、人我を何とかいはん。朝時が家に寇あるは、他人にありては小事なるべけれども、我に取りては大事なり。」とて、すみやかにはせ行きてこれをすくひたりき。

第三課　女德

婦人は、家に居ては、父母につかへ、人に嫁しては、舅姑夫につかふべきものなれば、つゝしみて父母舅姑夫につかへ、その心にそむかざらんことを心がくべし。古人も、婦人には、ことに、敬順の德の大切なることをいへり。しかれば、女は、常に敬順の二つを守るべし。敬は、つゝしむなり、順はしたがふなり。つゝしむとは、恐れてほしいまゝならざるを

いふ。およそ女の道は、順を尊ぶ。順の行はるるはひとへに敬むより起るなり。

いと女は、舅姑につかへて、至孝なりき。舅、年老いて、しば〳〵いとをのゝしることありしかども、いと、すこしもさからはずして、その心にそむくことなかりき。ある年の寒中に、舅、茄子を食せんことを望みければ、いと、ぬかづけの茄子を求め、水にひたして鹽をさり、味よく料理してすゝめきとぞ。

第四課　信實

人と交るには、信實なるべきなり。信實とは心正直にして、いつはりをいはず、人をあざむかず、何事にも、誠をつくすをいふなり。

人と交りて、信實ならざれば、人、我をうとんじ、親しき友もつひには交りをかふるに至るべし。人と交りて、信實なれば、人、我を信じ良き友、日々に我に親しむに至るべし。

宮崎重眞は、朋友に厚かりし人なりき、その病みて死なんとしける時、「朋友に約束して、その事半ばにて、さしおきたることはあらずや」と獨言しけるが、やがて、「大友某より刀をこゝろみくれよとて、あづかり、これを何某の許に遣はしおきたり、このよしを、告げ知らせおかずばあるべからず。」とて、すみやかに、右筆に命じて、その始末を認めしめ、「この外には、もはや忘れしことなし、今は心やすし。」とて、程なく身まかりきとぞ。

第五課　朋友

朱雀天皇の御代に、毎夜怪しき星あらはれたることありき。天文博士これをうらなひて、「大将に禍あるべし」といへり。

大将藤原實頼は、これを聞きて、神佛に祈りけるに、大将藤原仲平は、更にかかることを爲さざりき。ある人仲平に、「何とてわざはひをはらひ給はざるぞ」といひしに、仲平「今度の星、必ず大将にたゝるべしとの事ならば、禍を受くるは、我と實頼と二人の中なるべし、思ふに我は、年老いて才なければ、死すともをしからず。實頼は、年壯にして、才も賢し。我は、唯此の人ををしみて、身の爲めを思はず、故に祈らず。」といひけるとぞ。

およそ人と職を共にし、業を同じくするものは、我のみひとり功を立て、利を貪らんとすべからず、何事も、人の身を思ひやり、まづ人をして、功をとげ名を成さしむべし。

第六課　恭謙

おのれをひきさげて人を尊べば、その德、日に長じ、その學、日に進みて、人の愛敬を受くべし。おのれをあげて人をあなどれば、その德、日に衰へ、その學、日に退きて、人のそしりを受くべし。古人も、「謙は人の至德なり。」といひ、「おごりは天下の凶德なり。」といへり。

大岡忠相は、かしこき人なりき。ぬきんでられて寺社奉行となりける時、同列の人々、これをあなどりたれども、すこしも怒らず、身をへりくだりて、職をつとめければ、つひに同列の尊敬を受くるに至りき。

實のるほど稻はふすなり、人はたゞ、おもくなるほどそりかへりける。

第七課　寛恕

人の過ちをせめて、怒りのゝしるは、誠に益なきことなり。もし、その人、みづから過ちを悔いて、罪を謝しなば、これをゆるして、以後をいましむべし。たとひみづから謝せずとも、きびしくこれをせめずして、しづかにその過ちをたゞすべし。徳川光圀の家訓にも、「堪忍を忘るることなかれ。」とて、怒りをいましめられたり。

松平某の邸、火災にかゝりける時、家臣過ちて、鶴一羽をやき殺しければ、大いに恐れて、罪をまちけるに、某笑ひながら、「かの鶴は、千年目なるべし。」といひたるのみにて、さらにとがむる氣色見えざりきとぞ。

第八課　用意

およそ事をなすに、深く意を用ひざれば、往々過ちをまねくことあり。されば事をなすにあたりては、深く意を用ひて後の悔いなからんことをつとむべし。

昔、野田文藏といふ算術の達人ありき。ある時、大岡忠相、そのわざを試んとて文藏をまねきて、「その方の算法にくはしきは、かねてより聞き及べり、今わが目の前にて、わが望む所の割り算を致さんや。」といひけるに、文藏謹みて肯ひければ。忠相「さらば百を二つに割れば、いくつなるか」と問へり。文藏かろ〳〵しく答へず、算盤をかりうけて、割り算を爲し「百を二つに割れば五十なり。」と答へければ、忠相大いに感心し、「かく、念に念を入れてこそ、大切の役目をまかすに足るべきなれ。」とて、勘定役といふおもき役をさづけたり。

第九課　正直

人は正直なるをよしとす。正直とは、心すなほにしてまがらず、行ひいさぎよくして、一點のくもりなきをいふ。

昔、美濃の國に、太助といふものありき。ある日、その妻、寺にまゐらんとし、途にて金二兩をひろひければ、たゞちに歸りて夫に示し、「落し主は、いかばかりかかなしみ居るならん、とく返し與へたし。」とて夫と共にしきりにこれをさがしたり。

やがて、落し主その由を聞きて、たづね來りければ、夫妻大いによろこび、たゞちにその金を出して渡しに、落し主大いに悅び、禮をのべて、その商ふ所の雁一羽を出したり。夫妻はいくたびもことはりたる後、これを納め、その雁を賣りて、錢にかへ、おなじ町なるまづしき老婦にあたへ、破れたる屋根をつくろはしめたり。

第十課　節儉

人は、常に餘財を貯へて、不時の變にそなふべし。けだし、財を貯ふるは、用を節するにしくはなし。用を節すとは、日用の器物は、すべて、ていねいに取りあつかひ、破損なきよーに注意し、又、衣食のおごりをなさずして、質素の生活を爲すことをいふなり。

松下禪尼、ある時、子時賴を饗せんとて、その用意をしけるに、兄義景來りて、これを助けたりき。しかるに禪尼、手づから障子の破れをつくろひければ、義景これを見て、「さる事は、人に命じて爲さしめ給へ、且その破れを補はんよりは、新にはりかへんが、はるかにたやすからん。」といひき。禪尼答へて、「我もその理を知らざるにあらず。されどおよそ物は、小破をつくろへば、大破に至らぬものなれば、時賴にこの事を知らしめんとて、かくはするなり。」といはれきとぞ。

第十一課　博愛

蒲生氏郷の臣に岡野左内といふ人ありき。常には用を節して金銀を蓄へ、有益の事にはこれを出すことを惜まざりき。

左内、歳末に際し金策に窮するものには、嚴しく返金を約して、金を貸し與へき。期日に至り借主利息を持參して、元金の猶豫を乞ふことあれば、毎に、ていねいに應接し、「そは困難なるべし、利息は追って之を請けん、先づ持ち歸りて常用を達せらるべし。」といひて、決して利息をも取ることなかりき。人、左内に始めに嚴にして、終りに緩なるを怪み、其の故を問へば、「困窮の人に貸すは、元來恵與と思ふなり、然れども始めより之を言へば、其の人油斷して怠惰に流れ、愈窮すべし、故にかくなして、彼等をして油斷なからしめんと欲するなり。」とて、少しも返金を求むる念なかりきといふ。

第十二課　學を勉む

人は、生まれながらにして、知るものにあらず。何事も學びて後にこれを知るなり。學べば、知識すぐれ、家富みて、世に尊ばるれども、學ばざれば、愚かにして、家まづしく、人にいやしまる。

學問を爲すには、勇氣を出して、うまずたゆまず勉强すべし。覺えよきをたのみて怠る時は、覺え惡しくして勉强する人に劣るべし。

齋藤芝山は、熊本の人なりき、年二十四にして、始めて學に志し、ひとり樓上に坐し、生米を食ひて、晝夜書を讀み、道をきはめたり。時に、尾張の國、熱田の祠に、古書ありと聞き、たゞちにおもむきて、これをもとめたれども、その書あらざりしかば、つひに、諸國をめぐり、地理風土人情をつまびらかにし、大いに知識を得てかへりたりき。

第十三課　才智

才智は、事をなす基なり。人に才智なければ、舟に楫なきがごとく、事を行ひて、宜しきにかなふことなし。

智は、學びて得べく、才は、養ひて長ずべきものなれば、常にこれをみがきおきて、物事を處する時の用にそなへんことを心がくべし。

川村瑞軒は、江戸の人にて、甚だ才智に富みたりき。初め車力を業とせしが、後、人夫の請け負ひを業とせり。ある時、江戸に大火ありて、その家もやけ失せ、火もいまだ消えざるに、急に木曾山におもむき、多くの材木を買ひ、これを賣りて數千金を利せり。これより名聲大いにあらはれ、つひに幕府につかへて、土木をつかさどり、奥羽の海運の業を進め、大阪の諸川を治めて、いちじるしき功をあらはしき。

第十四課　身を修む

室鳩巣は江戸の人にして、年わかき時より賢かりき。長じて木下順庵につきて學び、學成りて後、幕府につかへたりき。

ある時、將軍吉宗の前に出で、修身の二字を講じて、「修身とは、まづ手短にいへば、身の修理をすることなり、もし、一言一行にても、たゞ氣まゝにふるまひて、道理にそむくことあらんには、これすなはち身の破損なり、これを修理せずして、すておかんには、つひに大破にも及ぶべし。」と説かれき。

されば人は、常にわが身をかへりみて、平生の言行をつゝしみ、小破のうちに修理して、大破に至らしめざることを心がくべし。

第十五課　公益

永島安龍は、富士のすそ野なる新倉村の人なりき。年わかきころ江戸に出でて、漢學を修め、又醫學を學びたり。後、鄉に歸りて、醫業を開きけるに、治療を請ふもの、つねに門に

滿ち、家にはかに榮え、財大いに豐かになれり。しかるに、その居村、水にとぼしくして、人人難儀しければ、金三百兩を出して、資本となし、その子靜をして、村吏と議して、みぞをうがたしめたり。功成るに及びて、水大いに至り、瘠地變じて、良田となりしかば、村民喜びて、その恩德を謝したり。

およそ人を利し世を益することは、たれもかくありたきものなり。

第十六課　忠君

君に忠し、國につくすは、臣民の本分なり、厚くわきまへずばあるべからず。

延元元年、足利尊氏九州の大軍をひきぬて、攻め上るよし聞えければ、朝廷、楠木正成をして、兵庫におもむきて、尊氏を防がしめ給へり。正成、都を立ち、櫻井の宿に至り、その子正行を召し、「この度の戰ひは誠に天下の大事なり。思ふに、我又汝を見ることなかるべし。我死なば、天下は必ず尊氏に歸すべし。されども、利に迷ひ命ををしみ、敵に降參して、父が多年の忠義を空しくすべからず。一族郎從、一人たりとも生きのこりてあらんには、金剛山の城にこもり、時節をまちて、忠義の旗をひるがへし、再び君の御世と成し奉れ。」とさとして、正行をば、河内に歸らしめ、それより兵庫におもむき、賊をふせぎて、つひに討ち死にしたりき。

第十六課　義勇

國家の爲めに、一意その職を守りて身命をかへりみざる、これを「義勇公に奉ず」といふ。そも〳〵戰爭は、死の業なり、よく死するものは勝ち、よく死せざるものは負く。この故に國家一旦緩急ありて、外國と兵を交ふるに當りては、國民みな義勇にして、よくこれに死する覺悟なかるべからず。

海洋島の海戰に、松島艦、敵の砲彈を受けて、數十人一時に死せしかども、水兵ども少しも恐れず、いよ〳〵勇み戰ひしのみならず、痛手をおへるものすら、今はのきはに至るまで、戰勝を祈る外には他念なかりきとぞ。

(自一至八) 明治二十六年十月十日印刷同年十月十三日發行
(五、七、八) 明治二十六年十二月廿八日訂正再版印刷同年十二月卅一日發行
(自一至八) 明治三十四年四月廿四日修正三版印刷同年四月廿八日發行
(自一至八) 明治三十四年八月十日修正四版印刷同年八月十四日發行

(定價)
卷一金七錢貳厘　卷二金七錢貳厘　卷三金七錢貳厘　卷四金八錢四厘
卷五金八錢四厘　卷六金八錢四厘　卷七金八錢四厘　卷八金八錢四厘

修正高日鉉

著作者　渡邊政吉
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社　東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者　原亮一郎　東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
賣捌所　各府縣特約販賣所

不許複製

◎弊社ハ常ニ書籍ノ用紙印刷製本等ニ注意シ勉メテ其堅牢ヲ期セリ、サレド多數ノ中萬一學年間ノ使用ニ耐ヘザルガ如キ粗製ノモノ有之候ハバ御通知次第無代價ヲ以テ御引換可申上候

◎本書ハ僻遠ノ地ニ至ルモ定價ヲ超過シテ賣捌カシムルコトナキハ勿論直接ノ御注文ハ多少ニ拘ラズ運賃ヲモ負擔可仕候

129

正修

日本修身書

高等小學用

卷三

8
89

K120.1
133a
3